

# 地理的分野の学習意欲を向上させる歴史授業の設計

岡 真奈美

鳥取大学附属中学校

E-mail: [oka-m@tottori-u.ac.jp](mailto:oka-m@tottori-u.ac.jp)

**OKA Manami (Tottori University Junior High School): Designing History Lessons to Motivate Students to Learn Geography.**

**要旨** — 多くの中学生は、中学校入学時にすでに地理の学習に苦手意識を持っている。そのため、歴史の学習に地理の知識を活用することで、地理の学習に対する苦手意識を減らしたり、意欲を高めたりすることができるのではないかと仮定し、歴史の授業設計を行った。授業を作る際に、研究主題である「ともに広げる」活動(拡散思考)、「ともに深める」活動(収束思考)を取り入れることで、協働的に思考を拡散し、また収束させることができた。結果として、地理的分野に対する学習意欲の向上がみられた。

**キーワード** 地理学習の活用 歴史学習 拡散思考 収束思考

**Abstract** — Many students already have a sense of difficulty in learning geography when they enter junior high school. Therefore, I designed a history class based on the assumption that using knowledge of geography in history learning would reduce the sense of difficulty and increase the students' motivation for learning. By incorporating the research themes of "broadening and deepening together" and "deepening together" activities into the lesson design, we were able to diffuse and converge thinking in a cooperative manner. As a result, the students' motivation for learning geographical subjects increased.

**Key words** — Use of Geography Study, History Class, divergent thinking, convergent thinking

## 1. 問題の所在

昨年度に引き続き2年連続で第1学年を担当した。昨年度、7年ぶりに第1学年の社会科の授業を担当して感じたのは、中学入学当初から、地理的分野が苦手だと思っている生徒が多いことだった。小学生の社会科地理に対する嫌厭傾向は以前より問題にされており、篠原(1992)は「地理学習に対する好嫌傾向は、小学生において嫌厭度が高く、中学生・高校生になると、その嫌厭度が低下する」と述べている。一方で、小学生の地理的興味・関心はかなり高いことにも触れ、児童の地理的興味・関心と地理学習の内容との乖離が嫌厭される要因ではないかと指摘している。

実際に2023年4月に本校1年生に実施したアンケートでも、小学生の時の社会科の授業への取り組みについて「どの分野も意欲的に取り組めた」が51%であるが、「歴史の内容は意欲的に取り組めた」は40%に上り、「どの分野も意欲的に取り組

めなかった」の6%を合わせると、46%の生徒が地理的分野について苦手意識を持っていることが分かった。(表1)

同アンケートの自由記述では、歴史的分野を意欲的に学習できた理由として「歴史人物の考えや行動が素晴らしいと思ったから」「歴史の授業は昔の人たちが戦争などの争いをしているところや政治を知るのが面白かったから」など、人物の物語として楽しんで学んでいる様子がみられる。しかし、地理的分野への言及は少なく、「地理が苦手だったから、歴史を頑張ろうと思った」など地理的分野への苦手意識を記述する生徒もいた。

そこで本年度は、地理的分野の学習が活用できる歴史的分野の授業設計に取り組んだ。授業設計の際には、本年度の研究主題である「ともに広げ、ともに深める」活動を組み込み、生徒が地理の既習事項をやりくりして、最適解にたどり着けるように意図した。

表1 学習意欲についてのアンケート結果

	4月 (n=138)	
どの分野も意欲的に取り組めた	70	51%
地理の内容は意欲的に取り組めた	4	3%
歴史の内容は意欲的に取り組めた	56	40%
どの分野も意欲的に取り組めなかった	8	6%

## 2. 教科で伸ばしたい力

本年度、本校の社会科において伸ばしたい力を「自分の考えたことを表現する力」と設定した。その力の構成要素(下位の要素)として「根拠をもとに自分の考えを組み立てる力」と「適切に資料を活用する力」を設定した。つまり、教科の中で、資料に基づいて自分の考えを表現するような授業を

設計する必要がある。

しかし、資料に基づいて思考し表現する収束思考(クリティカルシンキング)だけでは、思考法としての偏りがうまれる。現在、子どもたちを取り巻く社会は、不安定で不確実な要素が多く、VUCA とよばれる時代に突入している。この様な時代において、自分の考え(意思決定)を確定した事実だけで導くことは難しくなっている。そのような現代社会において、本校の研究主題である「ともに広げ」る学習活動(拡散思考を取り入れた活動)が有効に働くと考えられる。

三石(2006)は、意思決定とは①結果が明らかに分かっているもの②結果が不明であるものとの分けられると述べている。

「②の場合は、部分的な不確定要素が常に存在する中での意思決定を迫られるのである。そのような状態においては、収束思考よりも拡散思考が有効に働く場合がある。

拡散思考とは、ある事実や題材をもとに次から次へと広げていくような思考方法である。どこまで広がるかは全くわからない。言い方を変えれば「正解の無い」問題に対する「考え方の技術」である。」とも述べている。

つまり、有効な意思決定を行うには、データや資料を基にした収束思考だけでなく、拡散思考との往還が必要になってくると言える。

### 3. 授業の実際

#### 3.1 授業計画

地理的分野の学習を歴史的分野に活用するにあたり、昨年度とは違う年間計画を立てた。具体

的には、地理的分野第1部「世界と日本の地域構成」の学習後に歴史的分野第2章「古代までの日本」を学習する計画を入れ替え、第2部「世界のさまざまな地域」第1章「人々の生活と環境」を学習してから、古代の学習を行った。

これは、世界の文明の発展と世界の気候とを連動させて学ばせるねらいがある。本単元では、これまで地理的分野で学習した内容を活用(やりくり)できる発展課題として「古代文明は、なぜ乾燥帯で発生するのか」という問いを設定した。展開は表2の通り。

本年度の研究主題である「ともに広げる」活動を第1時に設定し、様々な予想の中から自分が探求したいものを選べるようにした。また、第3時に「ともに深める」活動を設定し、個別探究した内容の共通点などをクラスで集約することで、問いに迫れるように計画した。

#### 3.2 授業の詳細

第1時では全員が予想を出し、納得できる予想とその理由を伝え合った。図1は第1時の板書の様子である。クラス全員が出した予想の中から良い予想として選ばれたものを表3に示した。(表3中下線は筆者加筆)表中、下線を引いた部分は地理的分野の学習を活用したものであり、既習事項を結び付けて予想を立てていることがわかる。

第2時では図書館を利用して、自分の立てた予想を裏付ける資料を探した。

第3時では、調べた資料を共有して問いへ迫った。(図2)

例えば「昔は温暖だったのではないか」という予

表2 授業展開

	時間	○学習活動・課題	地理的分野の活用
ともに広げる	1	①地理的分野で学習した世界の気候区分と古代文明の世界地図を比較し、古代文明が乾燥帯で発生している理由を予想する。 ②予想をクラスで共有し、自分の探究する「予想」を選ぶ。  なぜ古代文明は乾燥帯に発生するのか予想しよう。	・世界の気候区分 ・乾燥帯では降水量が少なく、本来なら食料生産に向いていない。 ・現在では温帯の方が人口が集中している。
ともに深める	2	①予想が正しいかどうか、資料を集める。 ②わかったことをまとめる。  予想を裏付ける資料を見つけよう。	
ともに深める	3	①クラスで集めた情報を共有する。 ②共有した内容をもとに、課題についての考えをまとめる。  集めた資料から、乾燥帯で発生する理由を説明しよう。	・古代文明が発生した河川は、温帯地域を水源としている。 ・温帯は降水量が多いので日照時間が少ない。

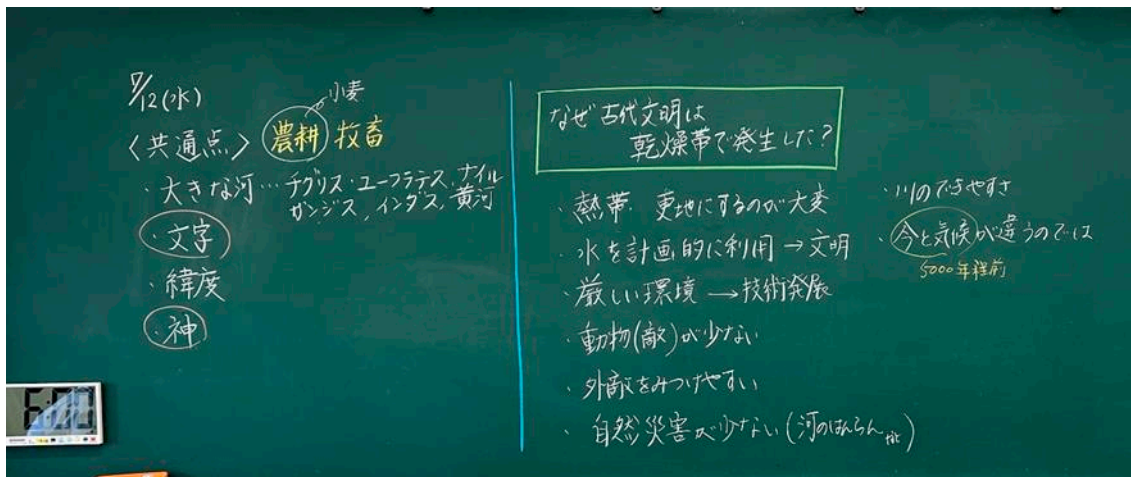


図1 生徒の共有した予想

表3 生徒が選んだ予想

- ・乾燥帯の方が文字を残しやすい(腐食の心配がない)
- ・外敵(動物)が少ない
- ・熱帯は更地にするのが大変
- ・自然災害が少ない
- ・今の気候と違っていた
- ・少ない水を計画的に利用することで文明ができた
- ・厳しい環境だから技術が発展した
- ・石や粘土は加工しやすい(建物が作りやすい)
- ・狩りがしやすい
- ・雨が少なくて天候に左右されない
- ・火が起こしやすい
- ・病気にかかりにくい
- ・湿気がないから食べ物を保存しやすい
- ・貧しいから神様を信じていた

想を立てた生徒は、文明発生よりもはるか昔から気候変動が起こっていて文明が発生した時には、すでに乾燥帯であったことを調べていた。この情報を共有することによって、乾燥化が文明を発生させている要因になっていることをクラスの全員が認識できていた。

これらの内容から、農耕牧畜には水が必要であるが、温帯や熱帯のように自然に降ってくる雨では水量をコントロールできず、文明を支えるだけの穀物生産が難しいことを導きだした。

ここから、地理的分野「乾燥した地域の暮らし」で学習した「かんがい」という言葉を関連付けて説明する生徒もいた。

生徒のまとめからも、自分が個別に探究した内容だけでなく、共有した情報をもとに問いに迫っている様子が見られる。例えば表4では、乾燥帯の気候条件、小麦の生育条件、灌漑の活用、灌漑事業を行うための労働力の確保などの要素を盛り込んでまとめている。表5では、湿度と開墾のしやすさという側面から記述している。(表4, 5)

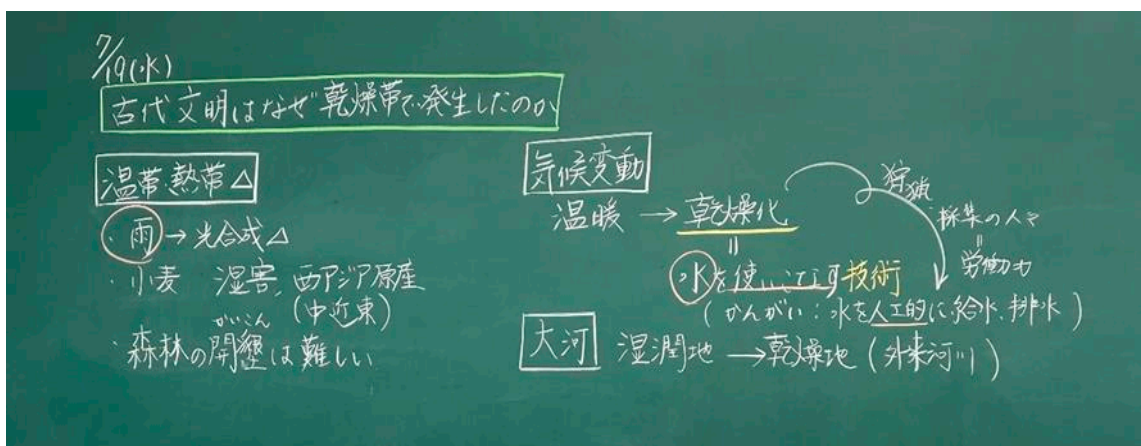


図2 予想をもとに調べた内容の共有

表 4 生徒の論述①

乾燥帯で文明が発達する理由は、雨が降らないからだと思いました。雨が降ると、植物の光合成ができないし、小麦はかわいた土地を好むので食料が安定してとることができなくなってしまう。また、少ない水を使いこなす技術も文明の発達に関わっていると思いました。温暖だった気候が乾燥化して、水を上手に使える技術と狩猟などができなくなった人たちが労働力になって人が集まったので文明が発達したと思いました。

表 5 生徒の論述②

食物を、保管して長持ちするために湿気が少ない場所を選んだり、乾燥していると木があまりなく開墾しやすいことから乾燥帯に文明が発展していることが分かった。また、農耕は水がないと育たないため大河の近くに文明が広がったことが分かった。

さらに、表 6 の生徒の記述では、乾燥した地域であることから火の起こしやすさを連想して論述している。これは、「人類のおこり」の単元で学習した内容であり、既習の知識を活用していることがわかる。

結果として、生徒たちは自分の設定した予想(仮説)だけを調べたにも関わらず、ともに広げ、と

表 6 生徒の論述③

牧畜の初めである小麦は湿害に弱く、雨が少ない乾燥した気候で育ちやすく、田畑などを作るために必要な森林の開墾には、あまり発達していない斧などですするためには湿気が高い木よりも乾いた木の方が切り倒しやすい。また、乾燥帯はあまり水がないために水を使いこなす技術が必要だったので、その技術で文明が発達し、暖をとったり、動物から身を守ったりするために必要な火は、乾燥している方が起こしやすい。

もに深める活動を通して、それぞれが調べた内容だけでなく、分野を問わず様々な既習の事項を関連づけて問いに迫ろうとしていた。

#### 4. 成果と課題

まずは、ともに広げる活動、ともに深める活動について生徒がどのように感じたのかを、授業後の生徒の記述から見ていった。表 7-1, 7-2 は生徒の記述を抜粋したものである。(表 7-1, 7-2 中下線は筆者加筆)表 7-1, 7-2 中下線部が、他者と関わりに関する記述である。友達の調べたことや気づいたことも自分の学びとして吸収しようとしていることがうかがえる。

また、同じ資料を使って調べていた班でも、出てくる意見の違いに面白さを見出している生徒もいた。

表 7 中、二重下線部は「やりくり」授業に関する記述である。生徒は初め、予想がつかないものに取り組むことに戸惑っていたり、「温かい地域が住みやすい」という固定概念を持っていたりしていたが学習を進めるにしたがって明らかになっていく楽しさや、当然だと思っていたことが違っている驚きを感じていたことがわかる。

特に、本時の探究課題である「文明が乾燥帯から発生する」という事象は、歴史的分野の学習と地理的分野の学習とを重ね合わせると出てくる事実であり、この事実は「温暖な方が住みやすい」という生徒の持っている感覚を覆すものであった。

多くの生徒の「温帯が住みやすい」という感覚とは異なる課題であったため、様々な予想をあげることができ思考の拡散へとつながったのではないだろうかと考えられる。また、歴史的分野と地理的分野をまたいで知識をつなげたりすることで、より生徒の思考が深まるのではないだろうか。

表 7-1 授業のふりかえり (抜粋)

【ふりかえり】1クラスから抜粋

- ・図書館で調べたり友達の意見を聞くことで、古代文明がなぜ乾燥地帯にあるのかがまとまってわかりやすくなり結論に辿り着くことができてよかった。
- ・初めは、全く予想がつかなかったが授業を受けていくうちに少しずつわかるようになりました。
- ・4大文明は、最初は快適だから発達したと思っていたけれど、調べると厳しい環境で、人間は知恵を使って、死ぬ気で生き抜いてきたんだなと考えました。

表 7-2 授業のふりかえり (抜粋)

【ふりかえり】1クラスから抜粋  
 ・最初は温帯で文明が発生していてその土地が気候変動で乾燥帯に変わったと予想して調べましたが、調べた結果、その土地が元々乾燥帯で乾燥帯から文明が発生したことがわかって驚きました。班の人の意見を聞いたときは僕とは全く違う視点で調べてまとめた物を意見として発表してくれたので僕が調べてもわからなかったことがわかって良い勉強になりました。  
 ・雨が降ったら植物が育つと思っていたのでびっくりしました。  
 ・みんなの新しい意見がきけてよかった。みんなが同じ資料でやったが一人一人が違う意見だったので新しい発見があった。  
 ・いろんな予想があり、正解がない中で昔の人々に想いを馳せながら、様々な視点で考えた意見を共有して意見や視野を広げるということが学びました。昔から試行錯誤して技術をつくったことや、気候に着目したり、地理的な面から見て、一つにまとめるのは大変でしたが、順序を考えてみると発見があったりしてとても面白かったです。

次に、地理的分野の学習に対する意欲がどのように変化したかを調べた。2023年4月に実施したアンケートと同じものを、授業終了後の2023年7月に実施した。4月実施のアンケートは有効回答138名、7月実施のアンケートは有効回答135名である。(表8)このうち、マクネマー検定の対象は第1学年4クラス141名、有効回答は132名(93.6%)である。

「どの分野も意欲的に取り組めた」と回答した生徒が51%から65%に増加した。また、「地理の内

表 9 地理に対する苦手意識の分類

	4月	7月
地理学習高意欲群	72	98
地理学習低意欲群	60	34

n=132, 単位：人

表 10 地理に対する苦手意識の変化

		7月	
		地理学習 高意欲群	地理学習 低意欲群
4 月	地理学習 高意欲群	64	8
	地理学習 低意欲群	34	26

n=132, 単位：人,  $p < .01$  (マクネマー検定)  
 容は意欲的に取り組めた」と回答した生徒が3%から9%に増加しており、地理的分野の学習への意欲が向上していると言える。

「どの分野も意欲的に取り組めた」と「地理の内容は意欲的に取り組めた」とを回答した生徒を地理学習高意欲群、「歴史の内容は意欲的に取り組めた」と「どの分野も意欲的に取り組めなかった」と回答した生徒を地理学習低意欲群と分類したものを表に示した。(表9)その分類をもとに4月から7月までの生徒の意識の変化についてマクネマー検定を行った。4月に低意欲群だった生徒60人のうち、34人が高意欲群へ変化した。有意水準を.050として検定を行った結果、4月から7月において有意な偏りがあり、低意欲群から高意欲群に変化した生徒が増加したことが示された。(表10) ( $p=0.0001, p < .01$ )

しかし、生徒への聞き取りをしてみると、やはり「歴史よりも地理の方が難しい」という意見が多かった。理由としては、1年生の地理的分野は世界に関わる単元が多く、自分の日常から離れた内容になっていることが挙げられる。

今後は、世界の出来事や内容を、いかに生徒の興味関心のある事柄と関連付けて学ばせることが

表 8 学習意欲についてのアンケート結果比較

	4月 (n=138)		7月 (n=135)	
どの分野も意欲的に取り組めた	70	51%	88	65%
地理の内容は意欲的に取り組めた	4	3%	12	9%
歴史の内容は意欲的に取り組めた	56	40%	34	25%
どの分野も意欲的に取り組めなかった	8	6%	1	0.7%

できるかが課題となる。生徒の興味関心のあるものと関連付けることで、より有用性を感じることができ、学習意欲を向上させることができるのではないかと考えられる。

また、社会科だけにとどまらず、様々な教科との連携や総合的な学習への発展的な活用などによって有用性を感じることができのではないだろうか。

#### 参考文献

- 篠原重則(1992)社会科地理学習に対する好嫌傾向の形成機構 新地理, 39(4)
- 三石誠司(2006)意思決定と拡散思考—ケース・メソッドで学べるもの— 宮城大学食産業学部紀要 第1巻 第1号